

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可  
昭和二十九年一月十五日發行(毎月一回・十五日發行)

(通第五十八号)

# 慈光

第六卷 第一號

## 目

## 次

祖聖の御正当に際して……………白杵祖山……………(1)	尽十方の無碍光……………花田正夫……………(2)	近角常晉先生を憶ふ……………柳瀬留治……………(7)	佛の淨土をおもふ……………福島政雄……………(9)	新春法信抄……………(14)
-----------------------------	--------------------------	----------------------------	---------------------------	----------------

祖聖の御正當に際して

白杵祖山

一月十六日。今日は祖師聖人の御正當なり。九十年間、雨に風に霜に雪に、一生を菅の笠にわづかに雨露の苦しみを覆ひ、一身を竹の杖に憑りて、辛うじて老衰の悩みを支へ、自ら安んじて他の榮達を顧みず、徒らに世人の知遇を願はずして、唯如来の慈恩を仰ぐのみ。

自から安んずるの徳香は自然に内に薫発し、他を怨みざるの温容は法爾に外に流化す。是れ全く我が聖人の単に道を弘むるものに非ずして、それ自身が大道の本源なりしに由る。

我等は進一進し、歩一歩して転化すべきは、道に志すと云はんより、又道を行ひ道を弘むるなど云はんより、我が全身これ道、全力是れ道たるに体達せざるべからず、是れやがて祖聖を我が身に現成せしむる所以にして、また是れ自己を更に開發せしむる道理なり、祖聖を仰崇するの要は自から祖聖に相見し体達するにありとす。そもそも道に志すと云ひ、道を行ふといひ、道を弘むる

といひ、是等皆枝末なり。自から進んで道に同化し、更に転じて自己本来これ道なりとの覚悟こそ根本なるを体験するにあり。

願ふに道に志すものは道てふことを遠くに望み、それに進まんとする故、途中にて廢弛するもの多し。たまたま達せりとするものも、真の体達に非ざる故、単に時々思ひ出して榮しむといふ分齊なり。それはまだ恕すべし、誤りの甚だしきに至りては、吾すでに道に達せりなど、得たり賢しの高慢心を振りかざすに至りては最も戒慎すべき一大事なり。所謂志すといふ志が多く邪道曲路に踏み迷ひ易くして、而して未達に達し、未得に得して、達と未達、得と未得の辺涯なき一体の道。即ち志す自己と、志される道と、能志所志を二ながら亡じてこそ、真の道味は信嘗せられる若し此に到らずして、行ふ人と行はるる道と、弘むる人と弘められる道と懸隔を生ずる時は、人も人たらず道も道たらず。

嘆、躬自からは是れ道なる我が聖人の独りさびしき影のうづだかさ、如何にうづだかさかを仰ぎ、その広大なるに感泣せざるを得ず。

和歌の浦わの片男波の寄せかけく、帰らんと同じ。一人居て喜ばば二人と思ふべし、二人居て喜ばば三人と思ふべし、その一人は親鸞なり。

われなくも法は尽きまじ和歌の浦の  
青草人の あらんかぎりは

との御心は、永遠に、あらん限りを尽して寄せかへるべきを、自から道ならざる我等の狂妄なるは、祖聖を冒瀆し、祖聖に反逆しつつあるを切に感じ、可愧、可畏。それも単に、我等自己一人の狂妄なるに止まらず、ひいては萬人に及ぼさんとするに至る、最も戒慎恐懼せざるべからざるの大事なり。

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛

盡十方の無碍光

花田正夫

阿彌陀經で釈尊は一段と声を励まし給うて「舍利弗よ、どうして西方淨土の佛が阿彌陀と名告り出られてゐるか、お前には解るであらうか。それは彼の佛の光明が十方を照して障碍する所がないからである」と訓へて居られます。

天親菩薩は淨土論に「釈尊よ。私は一心に尽十方無碍光如来に歸命し、彼の安樂國に生れたいと願つて居ります」と自信の全体を表白して居られる。

親鸞聖人は南無阿彌陀佛の六字名号と共に、歸命尽十方無碍光如来の十字名号を本尊として常に拜んで居られる。

聖人の御消息には「阿彌陀佛には十二の光明があるけれども、その根本は無碍光ひとつである。その無碍光と申されるのは、よろづの、あさましく、わるいことに障へられないで、すくひ、たすけ給ふからである」と唯信坊に答へ

てゐられる。

又有名な歎異抄の第七章に「念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も、業報を感じることにあたはず、諸善も及ぶことなき故なりと、云々」と、白道無碍の風光を讃仰せられつつ念佛成佛の一筋道を辿られて居る。

聖人は特に和讃をもつて無碍光の徳を絶讃し給うて。

光雲ヒカリクモノゴトク 無碍サハリナキト 如ツラノゴトシ 虚空ソラノソコ

一切の有碍にさはりなし

光沢かぶらぬものぞなき

難思議を帰命せよ

尽十方の無碍光は

無明のやみをてらしつつ

一念欲喜するひとを

かならず滅度にいたらしむ

無碍光の利益より

威徳広大の信をえて

かならず煩惱のこぼりとけ

すなはち菩提のみづとなる

罪障功徳の体となる

こほりとみづのことくにて

こほりおほきにみづおほし

さはりおほきに徳おほし

尽十方無碍光の

大悲大願の海水に

煩惱の衆流帰しぬれば

智慧のうしほに一味なり

罪障煩惱の身が、光のめぐみをうけて心うるおひ智慧のひらけるのも、煩惱に眼閉ぢた無明黒暗の身に久遠の黎明を感じされるのも、廣大無辺の信心の大海に浮び、よろづの罪障の氷が功徳の水と転化せられるのも、その源はひとへに尽十方無碍の不思議な御力であつて、こころも、ことばもおよびもつかないことであると聖人は歎じて居られる

真宗信仰のかなめ

惟うに浄土真宗の眼目は「尽十方無碍光如来に帰命したてまつる」の一句につくされて居ります。

さて「帰命とは、本願招喚の勅命なり」と聖人は佛意を深く頂かれて破天荒の釈解をして居られます。

「本願招喚の勅命」とは、善導大師の二河白道の譬喩に

説かれてゐる、西岸上の彌陀佛の御呼び声であります。

「汝一心正念にして、直ちに來れ、我能く汝を護らん。すべて水火の難に墮することを畏れざれ」

念佛三昧の中に大師が感得せられた彌陀佛の本願の御心であります。我とは無碍光佛であり、能くとは、如何なる罪業をも必ず功徳に転化して下さる、へだてたまはず、すてたまはぬ、不思議なはたらきであります。即ち無碍光

佛が「我能く護らん」と自ら名告り出て下さる、招喚して下さる。この広大な御眞実に疑ふことが出来なくなる、信ぜしめ、帰命せしめられるのであります。

蓮如上人は、この本願招喚の勅命を御文にやはらけて「阿彌陀如来の仰せられけるやうは、末代の凡夫、罪業のわれ等たらんもの、罪はいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、必ず救ふべしと仰せられたり」と、わが御身にひきかけて道味信嘗して、御本意をお伝へ下さる。われ等、罪業深重の身に、煩惱熾盛の胸に「罪はいかほど深くとも、われを一心にたのまん衆生をば、必ず救ふべし」と本願招喚の意趣をおとどけ下さるのであります。

それでもなほ、我身の愚さ、劣なさ、あさましさにたぢろぐ者に「本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念佛まさるべき善なき故に、惡をもおそるべからず彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なき故に」と云々と聖人は仰せられ

更に「煩惱具足のわれらはいづれの行にても生死を離るることあるべからざるを憐みたまひて、願をおこしたまふ本意、惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人、もとも往生の正因なり」と、飽くまでも、わが御身にひきかけての切々哀々たる聖人の悲引の御心はわれら一切の罪障の薪を焼きつくさずばやまじと、烈々火と燃え給うてゐるのを感じ申すのであります。

無根の信をたまはる

讃岐の正松同行が「皆の衆は、他力が有難いと云ふけれど、わしは彌陀の自力が有難い」と云つたと伝へられて居ります。無二絶体の直実は一とらばたらきがその自性であります。恰もそれは、太陽が自らの放つ光で自分の姿を現すに似て、尽十方無碍光佛に帰依し奉るのは、ひとへに佛の大悲の光明に催されて、帰命の心、信する心を發起せしめられるのであります。終始一貫、佛力の独壇場であります。惟ふに阿闍王の救済の事案こそ、心にくだいまでにその消息を教へられ、惡重く障多き身を無限に方便引入せしめられます。

佛敵提婆にそそのかされて、父王を殺し、母后を幽閉した阿闍世王も、我兒への愛にひかされて遂に大逆の罪を自覚するに及んで、大懺悔に沈み、食も喉をこさず、夜も録

に眠れず、全身は膿血が流れると云ふ憐れな身となつた。六人の大臣は夫々に自説を述べて王を慰問したが王の苦惱は増すばかりであつた。

最後に、佛弟子であり、名医であり、王の親戚である者婆大臣が見舞うた。王は自らの大罪を悔い、地獄に必ずおつべき身を悲歎し続けてゐる、大臣はこの姿を見て「善き哉大王。親殺しは大罪であるが、すでに王は懺悔の心をおこされてゐる。懺悔の心なき者は畜生と名け人間とは申さない。懺悔の心ある者は必ず佛によつて救はれ得る人である」と慰めて、早く佛辺に詣で給ふやうにと勤めた。

王はこの勧めを聞くや「大逆の自分如き者が清淨の佛辺に近づけば、大地が裂けて、直ちに地獄に落ちる」と怖れおののいた。この王の叫びこそ、相對虚仮の心しかなない我々の心一杯の叫びであります。こちらがよくすれば相手もよくしてくれる、反對にこちらが悪くすれば相手も悪くする、かうした五分と五分の相對以外に我々は微塵も出られないのであります。そこに自分の様な大悪人をどうして佛がよくして下さるはづがあらうか、さういふことが金輪際あることではないと思ひかためてゐるのが我々の姿である。蟹は自分の甲羅相應の穴を掘る、佛の無碍の力、広大な真実も、私共には知る術もないのであります。

者婆は声を励まして、千人近い殺人を犯した外道も、嬰

して若し王にして者婆の勧めがなければ、救ひの道は永劫に塞がれて了ふであらうと述べられ、次に大慈悲の極みとも申すべき聖語「阿闍世のために涅槃に入らず」と宣し給ふのであります。

この一語は佛弟子の身を疑はしめたものであります。そこで近侍の弟子が「私共は一人残らず佛陀の入涅槃をすこしなりともお延ばし下さるやう懇願申したのに、佛陀は何の御答へもなかつた。それなのに大逆の阿闍世王のためのみ何故、涅槃に入らずと仰せられるのでありませうか」と質し奉ると「汝等はすでに我が教を修行し、智慧もひらけてゐるから、よしんば佛が涅槃に入つても不滅を信じてゐる。然し王は煩惱具足の凡夫で全くの盲目人であるから今眼を開いてやらないと永劫に救はれる機は来ない。それだから王を救ふまでは涅槃に入り得ないのだ」と答へ給うてゐる。

この「為阿闍世、不入涅槃」の釈尊の大悲こそ「十方衆生、若不生者、不取正覺」の彌陀佛の悲心そのままであり、成佛しないならば、自分は正覺を取らない」とは久遠実成の彌陀佛の眞実心であり、「阿闍世のために涅槃に入らず」とは、五濁の凡愚の我等を憐んで、人間界に應現せられた釈尊の告命であります。太陽の光明をうけて明月が

児の生き血をすすつた鬼子母も、痴鈍な槃得も、センダラ種に生れ肥汝み人夫を續けてゐた那提も、淪落の女蓮華色比丘尼も、へだてなく、佛心の大悲は救済し給うたと、生きた事例をあげ、佛が大王を捨て給ふことはないと言言するが、王の心は堅く閉ちて「どうして〜大悪の身を御相手下されようか」と呑み続ける。

時しもあれ天の一角から光明が現れ、王を照らすと、不思議にも王の病がおさまり心も爽やかとなつた。王は驚いて大臣に問ふと「これは佛陀の放ち給うた月愛三昧の光明である。恰も夏の暑さも月光に涼味を覚え、宵待草や夕顔は月影を待つて花が開くやうに、この光明は王の惛熱をおさめ心をやはらげるための佛の慈悲の光である」と答へた。王はすでにこの佛陀の慈光を被るや「者婆よ、如来世尊、我を念じ給ふや」と驚ろき質す。今が今まで疑ひへだて閉ぢてゐた王の心が、慈光にほころび始めたのである。

大臣は善び溢れながら、七人の子のうち一人が重病になれば、その親の心はひとへに病む兒の上に傾注せられる。佛陀の大慈悲も亦、逆悪の者の上に無限に注がれてゐると答へるのであります。

サラサウ樹下に靜坐し給ふ佛陀は、通力をもつて大臣と王の模様を遙見せられて、先づ善友の徳を讃へられる、そ

皎々と照り輝くが如くであります。

さて月愛三昧の光明を身にうけ、者婆の勧めを聞き、更に、空中から「佛はすでに涅槃の雲に入り給はうとしてゐる、若し佛ましますば王を救ふ人は永遠にないのだ。速に佛辺に詣でて御教を受けよ」の声がひびく。王は驚いて「誰ぞ」と聞けば「汝の父なり」と答へる。惟ふに生涯を篤く佛法に帰依した父上の心が危機一発の大切な時に、阿闍世の胸に徹するのであらう。

王車遂に佛辺に向うた。然し途上で「者婆汝も共に自象に乗れ。汝は佛弟子であるから地獄に墮ちることはあるまい。若し途中で自分が墮獄の危険に瀕する時は、堅く抱き止めてくれよ」と憐みを乞ひ、更に佛所に近づくも、佛弟子は深い禪定を樂しんで、靜寂なのに怖れを抱いては「伏兵に討たれるのではなからうか、佛弟子は衆多と聞くのにこの靜閑さは異様である」と怖れてゐる。それはかつて父王を待ち伏せて投獄した罪の自然として、他を疑はずに居られぬのである。

遂に佛前に詣でた時、待ち待たれた佛は「大王よ」と呼びかけ給うた。王はこれを聞いたが、内心に、自分如き大悪人を佛が大王と呼び給ふはづはないと、ひとりで思ひかためてゐるから、頭を左右に振つて、王らしい人物を探しとめた。

佛は自らの罪のために自由を失つて、左右を顧視する王を一層に憐み給うて「阿闍世大王よ」と重ねて呼びかけられる。王はこの時、始めて佛が「大王よ」と呼びかけられるのは自分であつたかと、瞠目疑視、佛陀の慈眼を仰いだ。ややしばらく涙にさらされて言葉もなかつたが、感極つて「世尊、私は始めて、佛心の平等にして、更に差別なきことを今知らせて頂きました。このよろこびは、天界に生れてその快樂をつくすとも、くらべやうもありません」と随喜して居ります。

其後淳々として佛陀の慰安と教誨は続くのでありますが慈悲に輝く佛陀の尊容を一目仰いだ、その刹那に王の心はとけ始め、遂に佛前に合掌しつゝ「世尊よ、無根の信を獲ました。恰もそれは悪臭強い伊蘭の林に、栴檀香木の芽が出て、悪臭が芳香と転じたと同様であります」と随喜し、遂には「この道が国にひろがりますならば長い地獄の苦も

## 近角常音先生を憶ふ

この八ヶ月静養中の先生、遂に八月六日世を去り給ふ。

信に感ふ幾年月を夜更けまで教へもとめて悩ませ申しぬ

御真実迸る火の遺瀨なく炭團のわれを火とし給ひき

いかならむ事もうけ入れ親身となり導きたびし慈しみは  
や  
生きの苦悩を唯念佛に超えしむと碎かせし果ての御不眠  
症

弟われに唯々信を伝へむと生れし常観ぞと宣らしたりけ  
る  
われを慈み導きし兄正しくも生ける佛と宣らしたりける  
親のごと思ふ気安さに敬ひもまをさすて来つ今日の今ま  
で

腦の一部軟化に病ますまにまにも念佛の一道搖がざりけ  
る  
環状動脈硬化の果ての絶ゆる息に念佛三ころしませしと  
いふ

慈しみ切なるに友語りあへする並ぶ朋の咽び泣くはや  
感極まり語りよどむにおのもく思ひ身に積みひそみ咽  
べる

真夜の三時に未だ坐りてませしといふ御名の尊さつきす  
在しけむ  
不眠症眠れぬままに尊かる御名に満され在しけむ夜々  
子の玩具いぢり惚けてませしといふそのあどけなさ今に  
して聞く

いとひません」と誓ひ奉つて居ります。

斯くて最後に「如来は一切の爲に、常に慈父母となりた  
まへり。当に知るべし、諸々の衆生は、皆これ如来の子な  
り。世尊の大慈悲は、衆の爲に苦行を修したまふこと、人  
の鬼魅にくるはされて、狂乱して所為多きが如し」と天地  
に向つて絶叫して居ります。

「阿闍世の爲に涅槃に入らず」との釈尊の大悲は、現に  
私の上に被る大慈であります。近角常音先生の御歌に

○このころこれ阿闍世とのたまひて

見捨てじといふ 御慈悲なりしか

○よしあしはひとにはあらん 大惡の

阿闍世われには よしあしはなし

とわが御身にひきかけて信味し、讚仰して居られます。

それがそのまま、碍り多き我身に注がれる無碍光でありま  
す。佛の御誓の自然の徳光であります。

## 柳瀨留治

廿七の夏なりしか住まむ空またく非ずなり泣きて参来つ

店をせば玩具屋をと言ひて姉上に笑はれませしと聞くも  
慕はし  
生き悩むことごとく一つ信の透る頭悩に解き放ちま  
しぬ

十月廿五日御郷里の御本葬にと西下

御遺骨国に帰らす時しもあれ颯風十三号上陸し来つ  
風速四十米不時停車なり関ヶ原の真中に吹き揺られつつ  
暗き夜に入る

行手に崩壊個所あり鉄橋おつ列車引返へさむとわが車掌  
いふ  
逆行して着ける停電の大垣市閉して眠れり食ふものもなき  
颯風の一夜あくるに晴天なり所在のあらず開通を待つ  
列車降りて徒歩連絡となり傾ける鉄橋を渡る重き荷をさ  
けて

かにかくに乗れるトラツク琵琶の湖畔わが先生の村に着  
きにけり  
なごやけき湖畔の村や用水路ゆるらに農家み寺に並ぶ  
七條の袈裟十数僧の読経のこゑ敵かなりよ香煙のひま  
屍は魚に興への御仰せ慕ひ給ひて御父の墓に

うからの骨等しく土となすべしと宣らしたりしか空しや  
も骨

# 佛の淨土をおもふ

福 島 政 雄

「極楽」といふ題で菊地寛の小説があるのを読んだことがある。時代は徳川時代で、或る信心深い老夫婦が極楽の蓮華の中に往生したといふのである。極楽はその名の通り

何とも言へぬ楽しい世界である。苦しみといふものがない老夫婦はお隣り同志で蓮華の上に座つてゐる。言ふに言はれぬ和やかな光が満ちみちてゐる。真暗い夜といふものがない。いつも夜明けのやうな澄みわたつた心持である。それがいつまでもつづく。飲食のわづらひもない。香を嗅げば腹が満ちる。かやうにして月日が過ぎて行く。別に仕事もないから蓮華の上に座つてゐるばかりである。一月二月、一年二年と日を数へることもなく、どれほどの月日が経つたかわからない。

老夫婦は次第に退屈になつて来る。お互に話をはじめる極楽淨土といふところはなるほど結構なところには相違ないが、こんなにして仕事も何も無くして過してゐては退屈で

たまらない。地獄といふところはどんなところだらうかとお互に話す。地獄の話に興味が出て来る。後には地獄の話をする時ばかりがお互に活気が出る。その他の時は全くつまらぬ、退屈の沈黙の中に過ぎて行く。

大体こんなことを書いた短篇の小説であつたが、これはまるで佛教を茶化したやうな小説でお淨土の見当ちがひをしてゐるのである。お経の中の淨土の莊嚴についての或る描写を淺薄に表面ばかり受取つて茶化して極楽を描いてゐる。こんな極楽はない。

一人人間といふものは活動して生きてゐるものである。その活動には頭の活動もあれば手足の活動もある。活動してゐるから生甲斐があると思つてゐる。その活動が全く無いやうになれば、實際人間としてはつまらぬ存在となるのである。極楽といふところが若し無活動の静寂の世界であるならば、そこに生れることはつまらぬこととなるであらう。

佛教の理想の境地をあらはす言葉としては涅槃寂靜とか

極楽無為とかいふ言葉が色々あつて、極めて消極的な無活動の境地のやうな、感じを与へる。死ぬれば無活動となり静かになるのであるから、死んで極楽無為涅槃界に入るのであると言はれる。灰身滅智といふやうな言葉もあつて、この吾々のからだは灰になり智のはたらきも無くなる境地に入つて行くのが佛教の理想であるやうにも説かれるが、併しこれは小乗の悟りであつて大乘の悟りはそんなことではないと言はれる。それでも淨土教は大乘の教でありながら、此の世のいのちが終つて佛のお淨土に入つてはじめて悟りが開けると説かれてゐる。

それならばそのお淨土に往生した趣はどんなものであらうか、それは無碍の世界に入るのであつて、これからは大活動をして一切の衆生を利益すると述べられてゐる。無碍といふのは何物にも妨げられないといふのである。此の世の活動は如何に大活動をする人でもそれぞれの妨げがある外界の妨げのみならず自分のいのちの中に妨げがある。それは煩惱の妨げであつて貪瞋痴慢などの煩惱の妨げが始終われわれの活動を妨げてゐる。政治、経済、教育、宗教、何れの方面を見ても、内に外に此の妨げが充満してゐる。この障得から徹底的に解脱する世界として佛のお淨土があ

る。

それは佛のお淨土であるから佛の悟りが開けてゐない吾吾にわかるものではないが、併し釈尊はお経の中でお淨土のことを説いておいでになる。その説き方は象徴的といふやうな説き方であつて金銀珊瑚などの七宝とか宝樹宝池樓閣や静寂の音楽とか限りなき光とかいふことで説かれてゐるその表面だけ見ると菊地寛の極楽のやうなことにもなる併し淨土の莊嚴の根源は何であるかと言へば佛の慈悲と智慧とである。私どもは佛の慈悲を我が身に受け、その智慧の光に照されるからお淨土といふものが信ぜられるのである。それは佛の眞実生命のあらはれである。お淨土と佛陀とは別々のものではない。佛様のいのちのあらはれがお淨土である。佛様のまことのいのちがお淨土を建立したまふのであるから、佛陀を信ずればお淨土も信ぜられる

お淨土について兎や角と論ずるのは実はまちがひであらう。私などもお淨土についての感じを言へば死んだ両親や子供に就いて直接の感じを持つてゐる。長女が四才で亡くなつた。その児はよく佛前に手をあはせ、お花を佛前にあけると、花！花！とついで来てよろこんだものである。その児が此の世における最後の言葉は、自分の家を自分のうちではないと言つて「はやくおうちへ帰りませう、すぐにおうちへ帰りませう」といふのであつた。佛様のお淨土へ

帰つた、此の兒は佛様のお使であつたといふのが私の感じであつて、その時以来私はお浄土の感じを持つやうになつた。理屈ではない直接の感じである。

父母を亡くしてから此の感じが更に深くなつた。父母が亡くなつてから父母のいのちは私のいのちとお浄土とを結ぶ生きたいのちとなつた。父母は佛様の尺十方の無碍の光明と一つになつて私の上に今現に大活動を續けてゐる。私はお念佛の上にそれを感じる。お浄土から生きた通信を常に受けてゐるやうなものである。

かうなつて来ると法華經壽量品の偈文のお浄土の意味がわかるやうである。此の世の親を亡くした子としての情の上では、なぜこんなにして親に死別せねばならぬかといふ愚痴の悲しみがあるけれども、父母を亡くして始めて吾々は眼がさめるのである。

衆生を度さんためにとて

方便して涅槃を示せども

而もまことには滅度せず

常に此に住りて法を説く

衆生すでに信じまつるひ

質直にして意やはらかに

併し觀經も住立空中の彌陀といふところでお浄土が韋提希夫人にびつたりとなつてゐるやうである。阿彌陀佛此を去ること遠からずと言はれた釈尊のお言葉が韋提希夫人の実感として感ぜられ、佛心とは大慈悲是なりといふことが夫人に体認せられて、夫人にお浄土の光明の返照がかがやき、夫人は最初逃避しようとした此の娑婆世界に落ち着くこととなる。お浄土の開け口が夫人に開けたといふやうなことで、夫人はお念佛の人となつてゐる。その間の消息は誠に微妙である。

空中に住立したまふ阿彌陀佛といふのは、私ども衆生の苦悩の有様を見て、じつとして居られず、私共の苦悩のただ中に飛び込んで下さる佛陀と感ぜられる。誠に私ごとき者は此の人生の苦悩に突当つてはじめて佛陀の御慈悲を感じるやうになつたものである。苦しみ、悩み、悲しみ、痛みが此の人生に無ければ、私などは決して御慈悲に目ざめるといふことがなかつたらうと思はれる。又此の世において大切に思ふ親や兄弟や、親戚や、友人と死別するといふことが無ければ私のやうな者は佛のお浄土を感じるといふこともなかつたであらう。人生無常なるが故に常住のお浄土が感ぜられる。そのお浄土は地理的に西方遙かな彼方にあるのではない。私どもは西方を念することによつて、お浄土へといふ心が定まるのであるが、現実の苦悩に突当

一心に佛を見奉らんと欲して

自ら身命をも惜まざらん

時にわれ、および衆僧

俱に靈鷲の山に出でなん

この法華經壽量品の偈文が私の心に生きて来る。まことに私は父母を亡して始めて永遠無窮の佛のお浄土に目がさめたのである。

### 三、

学生時代に指方立相の彌陀と唯心の浄土、己身の彌陀とは違ふかどうかといふ問題を、前田慧雲先生から出されたことがある。むつかしい問題で当時私はどんな答案を書いたか全く記憶してゐない。

西方十萬億の佛土を過ぎて世界があり、名づけて極楽といふ、そこに佛がまします。号して阿彌陀といふとある、阿彌陀經は私が繰り返して誦誦してゐるお經である。彌陀も浄土も我が心にあるといふのは禪の悟りであらうが、私にはこんなことを断言する資格がない。私は觀無量壽經に描かれてあるお浄土との趣の違ひを近年考へてゐる。觀經のお浄土は遙かにあこがれの眼に映する浄土のやうであり大經の浄土は直接の感じとして伝へられる浄土といふ趣があるやうである。觀經の方は説き方が大袈裟になつて居り大經の方はすつきりとしてゐる。

ることによつてその西方浄土の香りともいふべきものをお慈悲によつて感ぜしめられる。無常の人生を逃避してお浄土へ往くのではない、無常の人生、苦悩の人生のただ中に西方浄土の光を佛陀の慈悲のいのちとして感ずる。此の世がそのままにお浄土ではないけれども、此の世を離れてお浄土を感じるのではない。此の世にお浄土の光がさすのである。

大經にはお浄土の有様をひろく、大きく、とびぬけてすぐれて何とも言へないと述べられてゐる。それは佛陀の智慧と慈悲とによつて建立せられて行く世界であるが、私ども苦悩の衆生を離れて建立せられるのではなく、浄土は娑婆世界と対立してゐるのではない。絶対界である。それだから私どもは此の世にありながら浄土のいぶきに触れ、此の世のいのち終れば、即得往生といふことになるのであると思ふ。それはすべて佛陀を信することによつて開けて行く世界である。

### 四、

娑婆即浄土といふ考がある。此の苦悩の娑婆世界を理想化して此の世に浄土を實現するといふのである。此の考へ方は浄土といふことに徹しない考であるとおもふ。

一体佛教は理想主義でもなければ自然主義でもない。若し理想主義ならば此の地球上の人類社会に理想の世界を實現して行く、そこに浄土があるといふであらう。然し人類

社会には常に深刻な苦悩がつづき、政治や経済がどんなに整つても、科学がどんなに進んでも、それは一面に福祉を進めると同時に他面には必ず被害をもたらす。今更生老病死と言はなくても人生の根本の苦悩は実に深刻である。かやうな人生に対して佛の淨土は人間社会將來の理想を示されたものであるとは決して言へない。人間の社会は今から一万年経つても十万年経つても決して理想的にはならない科学が進歩して便益もある代りに一方では原子爆弾などで人類の大量虐殺を行ひ、戦争は益々惨酷になつて行く。政治も教育も虚偽ばかり行つてゐる。かやうな人類生活の將來に佛の淨土を理想として考へるなどは全く無意義のことである。

それならば佛教は此の人類の生活をそのままで宣しいと見るかと言へば決してさうではない。佛教は自然主義ではない、淨土教は悪人救済の教であるが、人類社会の罪惡そのままで宣しいといふのではない。惡は思ふままに行つても差支ないといふのは自然主義であるが、悪人救済の淨土教は決してさやうな自然主義ではない。

人間の煩惱は止まず、人間社会の罪惡はなかなか無くならないが、そのままで宣しいといはれるでもなく、それを淨土の規範によつて律しようといふのでもなく、その煩

悩罪濁のやまない人間、人類社会を無限の大悲を以て徹見し、之を憐み、之を悲しみ、此の人間社会に久遠のまことのいのちをそそぎ与へようとせられるのが佛陀であり、その佛陀のまことによつて内面的に無限に建立せられて行く世界が淨土である。その淨土は過去・現在・未來を超越して直に私どものいのちに触れる。過去の幻影でもなく、將來の夢想でもなく、むしろ永遠の現在ともいふやうな趣で私共に開かれてある佛の慈悲の内面の世界である。西方十萬億佛土の世界であり、しかも唯今現前の苦悩に触れる世界であるといふ味ひは微妙である。

淨土は佛の広大な内面世界といふべきものであるから無論私どもの主観の内面といふやうなものではない。佛の唯心の淨土、佛の已心の彌陀であるとおもふ。釈尊はその悟りの面の最も奥深いところにおいて彌陀尊を拜んでおいでになる。そこに広大無辺の淨土を感じておいでになる。その釈尊の感じが私どものお念佛の裡にひびくのである。そして私どもその淨土を感じさせて頂くのである。

未完

### 新春法信抄

鳥根縣 三瓶鶴英  
新年鐘声念佛緣 半夜感々度山川

皇国進路君知不 無碍一道易行船

千門瑞氣物情新 靜座鬼神宿禰人

且暮念佛独接續 恩波七十有三春

どこまでもどうにもならぬ老の身にどこ

までもの御慈悲嬉しや

盛岡市 中川初太郎

きよらけきこの無量光に抱かれて今朝も  
門出す歳の始めに

直方市 吉田延世

佛天の御加護を信じて、人事をつくす。

国の火事消さうとオームの如く、今年も  
つとめん、むなしきこと、知りながらも。

萩市 村田芳彦

お育てを蒙ります御蔭にて、私の老ひ行  
く身の心細さと同時に、無限の暖い御惠  
みをしみじくと味けて頂いて、これまで  
にない朗かな新春を迎えさせて頂きました

奈良市 松尾友雄

何も彼もアカン私にや親がある。アイタ  
人より嬉しいナ!

わたしやワロ、迷ひが地性、これを目  
当の御本願、合掌せずに居られうか。

福井縣 長田智竜

元朝や 子等への願ひ 一つあり

愛知縣 松本虚舟

元朝や御あかしつけて我を呼ぶみ声尊く  
仰ぎてぞ聞く

岐阜縣 能戸得一

聞きたらぬ汝なりなほも聞け聞くと七十  
四の齡たまへる

岡山市 千輪清海

初日さす我が庭にしも大樹あり戦災の跡  
深く刻みて

長野縣 高梨信道

みほとけの深きみのりをよるこびてみ名  
となへつゝ初日おろがむ

愛知縣 中井丘造

吾病めば良き友のごと月々の小さき冊子  
の吾を見舞へり

愛媛縣 木村誠一

やはらぎの光となりてわが胸に照りとほ

らせる久遠のみこゝろ

滋賀縣 西村武三

新年お目出度うございます。想へば四十  
年の間、否久遠却來惱みに悩み、狂ひに狂  
うて参りましたこの私にも、逆誘のなれの  
果てのうらぶれの身に、ほのぼのと心の春  
が訪れて参り、お念佛が現れて下さいませ  
有り難いことあります。御恩のきはみで  
あります。

岡山縣 愛生園同人

本願力に生かされて苦難の年をつゝがな  
く送り、慈光ゆたかな初日の光のもとに、  
高らかに念佛申し合せました。

本年は報恩の集ひ、惠みの集ひ等も催し  
同朋の家の弘設を發願して居ります。

下松市 相本アイ子

今日を喜べ、過去を忘れよ、心に太陽をも  
て、等と長年の療養生活を鞭打ち励まして  
來ましたが、願ふ下から崩れて了ひます。  
ところが、身も心も駄目な私お目当の御本  
願と承り、今まで枝末にかゝつらつて本末  
を顛倒してゐたことを知らされ、大悲ひと  
つを仰いで居ります。有り難いことあり  
ます。



編集後記

新春を諷んで御慶び申し上げます。今年も白道の伴侶の一人に加へて頂き、絶学無為の私を、慈育と啓発をして頂きたいとお願ひ申し上げます。

佛果菩提をアノクタラサンミヤクサンボダイと梵語で申します。漢文では無上正徧道、無上正真道と訳されて居ります。この上もないのですから、この下もない、絶対であります、相対を越えた、かたよりのない、正しいまことの道、といふ意味であります。この大道を悟りあかす、その人を佛陀、覺者と申され、その大道を身につけ給ふところから、尽十方無碍の無限の智慧と無窮の慈悲のひかりを放たれる、そして世に不滅の燈炬を掲げて未來際を照して下さる方が佛陀であります。

この佛に帰依しまつる、そこに内に外に碍り多き身が、そのままに、碍りなくへだてなきひかりを被る、この淨土廻光のめぐみにあづかつて、古今に通じ、十方に遍する、廣大無辺の信味を頂くのであります。

日は暮れて道とほけれどみ佛の  
久遠のひかりわれを照すも

福島先生詠

天地にみつるとこよの大き道を

あかさんねがひたたひとすじに

白井先生詠

年頭心新しきまに、大道をまたあらたに感佩申す次第であります

▲「祖聖の御正旨」は白杵老師の祖聖を心ゆくまで追慕渴仰せられた御遺稿を頂きました人即道、道即人、人法不二の信譽、そこに自利利他の念佛無碍の大道が、雨が地を潤すが如く自然に伝はる。我等の狂妄なる身は口に佛法ノと叫びながら常に法に墮して、絶えざる警策を被らねば邪道曲路に踏み迷ひ易い身と知らされませぬ。

▲「常智先生を憶ふ」は柳瀬氏主宰の短歌草原誌の十二月号から転載させて頂きました。越中出身、滿六十二、元文部省及參謀本部勤務、現在保育園長。東京都渋谷区代々木本町七三一が御住所です。

▲「淨土を憶ふ」の福島先生の御原稿は、今回大經の淨土の御講話を中心として「淨土の莊嚴」の書が出版せられるにつき書き訓へられた御原稿であります。私自身にとりまして初めて淨土の境界が血の通ふ世界として深く感得させて頂け始めましたのは先生の御講話からであります。淨土は私共の真実の故郷であります。御縁のある方々に「淨土の莊嚴」をお勧め申し上げます。京都市下京区花屋町西洞院、永田文昌堂發行。定価百円、送料八円。

▲「尽十方の無碍光」は障り多き身に被むる不可思議の徳光であり、永遠の黎明をそこに拜する。

心もよ 言葉も遠くとどかねば はしなく  
御名を唱へとそすれ  
手にさはるものこそなけれ法の道 それが  
さながら それにありせば 良寛詠

昭和二十九年一月十日印刷  
昭和二十九年一月十五日發行  
毎月一回十五日發行

一部 十七四(郵税共)  
定価 半年 百円(郵税共)  
一年分 二百四(郵税共)

名古屋南区駄上町二ノ二八

編集兼

花田 正夫

名古屋千種区千種町馬走二八

發行人

富田 隆

名古屋千種区千種町馬走二八

印刷所

千種印刷所

名古屋南区駄上町二ノ二八

一道會館

慈光社

振替口座 名古屋一〇四七〇番

慈光社 昭和二十九年一月十五日發行(毎月一回十五日發行)  
第三種郵便物認可